

系統的な体育授業を助ける体育手帳づくり

—スムーズな小中一貫教育を推進するために—

学籍番号 189965

氏名 渡部 千絵

主指導教員 野中 拓夫

1. 小中連携と小中一貫教育

2012年(平成24年)文部科学省 報告書「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」において、「小中連携」「小中一貫教育」は以下のように定義されている。

「小中連携」	小・中学校が互いに情報交換、交流することを通じ、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育
「小中一貫教育」	小中連携のうち、小・中学校が9年間を通じた教育課程を編成し、それに基づき行う系統的な教育

大阪府でも、多くの市町村において小中連携・小中一貫教育が推進され、モデル校区事業を実施している。筆者の在籍する寝屋川市では、平成17年度より全市的に小中一貫教育を推進し、中学校区の小中学校を一つの「学園」と考え、中学校区ごとに5年後、10年後の目標を見据え、特色ある中学校区づくりに向けた「寝屋川12学園構想」を推進してきた。

2. 学校文化の違いから考える小中一貫教育

小中一貫教育が求められている背景としては、小学校から中学校に進学する際の接続が円滑になっていないことが挙げられる。その一つの原因として、小・中学校間の接続期における学習指導、生徒指導の相違点がある。

寝屋川市立I中学校区では、I中学校・H小学校・C小学校の3校で小中一貫教育を推進しており、小中一貫教育推進会議等、学校間の連携体制を築くことは出来ている。しかし「連携教育」に留まり、学習指導、生徒指導等に関する具体的なカリキュラム・マネジメントの取組みはされていない点が課題だと言える。教員同士が、小学校文化・中学校文化を十分に理解し、お互いが歩み寄る姿勢を持つ事が、よりよい小中一貫教育推進の基盤になると考える。

3. 教科「体育」「保健体育」としての小中一貫教育

I中学校区の教員に、体育の各領域の授業に関するアンケート調査を実施したところ、小学校、中学校共に、児童生徒に運動を「楽しむ」ことを意識させたいという点は共通していた。これは学習指導要領における「豊かなスポーツライフの実現」に必要な不可欠な項目であろう。一方、学校文化の違いが顕著であったのは、中学校保健体育科教員の「集団規律」や「時間を守る」という回答である。小学校教員にはそのような記述がなかった。これは、中学校文化の中の生徒指導方法の違いの中でも、生徒指導方法の違いが、大きく影響を与えているからだと考えられる。

4. 【体育手帳】の開発

小中一貫教育で求められる学びの系統性・連続性を踏まえた、体育分野における学習指導を実現しなければならない。そのための指導改善の方策として【体育手帳】を作成し、検証することで、指導の充実に役立てることをめざす。【体育手帳】は児童・生徒が持ち、授業で活用する。また、中学校区として同じ【体育手帳】を9年間活用する事で、教員は授業の系統性を、前後の学年で考えるだけでなく、義務教育9年間の入口や出口を意識した授業づくりができないか考えた。児童・生徒にとっては、9年間の学びをポートフォリオとして残すことで、自身の学習状況等を児童生徒が自らふりかえり活用する事、そして小・中学校教員も児童生徒の今までの学びを把握できるようにする。

図1 児童Aの練習シート



平成30年度は、水泳とマット運動、2種類の【体育手帳】を作成し、令和元年度は、小学校教員と協働して、義務教育の始まりである小学校1年生の授業において【体育手帳】を活用した授業づくりを実践した。

①「練習シート」

マット運動の授業では、練習の途中でイラストやポイントを見て意識できるように作成した。児童の中には、イラストの中に記載されていないポイントに気づき、自分の言葉で記述している児童が見られた。(図1)

②「ふりかえりシート」

水泳の授業での目標を記述させたが、児童が自分の言葉で記述する事は難しく、担任がいくつかのキーワードを提示した。

以上のような小学校での授業実践で学んだ児童の実態や、小学校と中学校の授業における文化の違いから、小中一貫教育として、小中の教員が各領域の体育指導をする上で、理解しなければならない項目をまとめ、教員用の「【体育手帳】てびき」も作成した。

5. 成果と課題

【体育手帳】を作成する中で、児童の発達段階や学習内容を把握しておくことが、いかに大事かと考えさせられた。ひらがなの習得、生活習慣のきまりなど、中学校では当たり前に行える事を小学校で丁寧な指導する必要性について、中学校教員は心構えをしておくべきである。また小学校教員は、小学校でのマナーやルールの学習の積み重ねによって、中学校での学習がスムーズになることを忘れてはならない。

本研究において【体育手帳】は、水泳とマット運動の2種類を作成したが、小学校1年生から中学校3年生まで、全ての学年で授業実践をすることが出来ていない。今後、実際に活用し、使い勝手を聞きながら、改善・ブラッシュアップを重ねていきたい。

小中一貫教育をスムーズに推進するためにも、【体育手帳】が小中の教員がお互いに課題意識や共通認識を持ち、解決するためのツールとなり、更なる活用をめざし、筆者自身が積極的に働きかけていきたい。